慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョン・ フランシス・ ブレイ (四)
Sub Title	John Francis Bray (4)
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.4 (1962. 4) ,p.390(70)- 400(80)
JaLC DOI	10.14991/001.19620401-0070
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620401-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

ジョン・フランシス・ブレイ（四）

遊部久蔵

目次

一　発見史（第一号）
二　文献目録
　A　著書（第一号および第二号）
　B　草稿および資料（第二号）
　C　研究文献（第三号）
三　評伝（第三号および本号）
四　主著研究

三　評　伝（承前）

第三期　帰米後の生活（一八四二―一八九七年）

ブレイは一八四二年七月、帰米後しばらく弟のチャールズとともにボストンに滞在し、いくつかの新聞社につとめてまわり、九月にミシガンの Lapeer へいって四〇エーカーの農場を購入した。西部への移住の目的は、奥地の新鮮な空気と手労働とが彼の健康を回復することをのぞみ、また著作する閑暇をのぞんだのである。しかし負債を皆済するために一八四六年末までデトロイトの印刷工としてはたらいた。

一八四四年二月一四日、ブレイは Lapeer で結婚した。妻となった婦人、Martha Starkey は Lapeer の家具師の娘で、一八二五年頃イギリスでうまれた。[15] 彼女は一八七六年一二月一八日、五一歳で数カ月の病気（肺結核）ののちミシガンの Pontiac で死去した。ブレイはその年の日記に、"My poor wife died. She was an estimable woman." としるした。彼等は六人の子供をもったが、少年時代をすぎて生きのこったのは一人だけであった。

生きのこった一人の子供がフレデリク（Fred[eric] N. Bray）である。彼は一八五〇年四月三〇日に Pontiac でうまれ、一八八〇年八月二五日、最初の妻、Maggie Paton と結婚したが彼女は肺結核で一八八七年に死亡し、一八九〇年七月三日、第二の妻、Anna Holtz をむかえた。このアナがアグニス・イングリスによって見出され、ブレイに関する多くの貴重な資料を提供したことはすでに発見史においてのべたところである。彼女は先妻の遺児、Elga Myre Bray と Alice Clayton Bray とをそだてた。また一八九一年六月には彼女自身一子の母となったが、この子は病弱であったという。

一八四八年、ブレイは奥地の生活が閑暇にとぼしく頭脳労働にふさわしくないことにきづいて、彼の妻の親戚たちのいる Pontiac へうつった。そこで一八五一年春まで "The Jacksonian" という新聞の仕事をつづけた。一八五一年の秋にブレイ一家は Pontiac の近傍の農村へうつった。彼は一八五三年まで日雇い職人としてはたらき、その年、"Detroit Enquirer" の職工長としてデトロイトへいった。この仕事は夜間労働と日曜作業とをともなったので、彼はこれをやめ彼の弟たちに会いにボストンへいき、一八五四年の夏中そこにとどまった。その間に、弟のチャールズからリーズの従弟あてにかかれた書翰において、ブレイが一冊の書物をかいていることがしめされている。この書物は翌年刊行された『来るべき時代』（"The Coming Age"）であるが、チャールズはその書の刊行をのぞまなかった。なにごとにも保守的な彼は兄の思想に無神論的なものをかぎだして不安をかんじたが、兄が熱心に聖書をよんでいることをも注目した。ロイド・プリチャードはのべている。「あきらかにジョンは彼の後の諸著述において示されているような一定の目的をもくろんで聖書をよんでいたが、チャールズはこれをしらなかった。」[16]

一八五四年末、ブレイはデトロイトへかえり一八五五年末まで "Enquirer" ではたらいた。その年、"Enquirer" の廃刊とともに彼はふたたび日雇い職人となって、文字通り「その日暮しの」生活をした。

一八五五年、ブレイは『来るべき時代』を刊行した。すでにのべたように（文献目録A参照）、この書物はすでに一八五三年における神秘主義の研究をもとにしてできており、一八五四年ボストン滞在中に刊行しようとしてはたさなかったものである。しかも今回も八分冊中の二分冊のみが刊行されたにとどまる。この書物は当時流行の神秘主義を素朴な自然科学的唯物論の立場から批判したものであるが、不評であった。

一八五六年、デトロイトより Pontiac へかえり、そこで銀板写真撮影所（daguerreotype gallery）を買い、一〇年間同地で写真業に従事し、その間多少の成功をおさめた。

この写真師時代の一八六四年、ブレイは『アメリカの運命』（"American Destiny"）と題する一パンフレットを刊行した。当時アメリカは南北戦争中であったが、このパンフレットのなかでブレイは、アメリカの南部諸州の北部諸州から分離する権利を真の共和国の基礎として弁護し、戦争をアメリカ政府のすべての原則の侵害として非難した。本書中におけるブレイの立場がすでに文献目録で示したように反動的であることはいうまでもないが、これをマルクス・エンゲルスの内戦についての評論と対照すれば、一層あきらかとなる。[17]

一八六五年一二月、隣家におきた火事によってブレイの撮影所は類焼をこうむった。彼は息子とともに Pontiac のそばの小農場でくらすこととなり、市場向けの穀物や果実をつくって生計をたてた。これよりのち、ブレイはアメリカの労働新聞のためにたくさんの寄稿をした。彼が無数の論説や書翰をかいた新聞名は左の如くで

ある。[18]

1. "Canadian Labor Reformer"
2. "The Carpenter"
3. "The Chicago and Cincinnati Socialists"
4. "The Denver Labour Inquirer"
5. "The Detroit"
6. "Detroit Labor Leaf" (のちの "Advance and Labor Leaf")
7. "The Detroit Labor Review"
8. "The Detroit Socialist"
9. "The Hartford Examiner"
10. "The Irish World"
11. "John Swinton's Paper"
12. "The Milwaukee Emancipator"
13. "National Labor Tribune"
14. "Paterson Labor Standard"
15. "The San Francisco Truth"
16. "Spectator"
17. "The Trades"
18. "Unionist"
19. "The Weekly Worker"
20. "The Word"
21. "The Workingman's Advocate"

ブレイは "The Word" や "The Workingman's Advocate" への寄稿を通じて多くの人々としりあったが、そのなかに James Harvey というイギリス人がいた。彼は貨幣問題に関心をいだいていたが、ブレイにつぎの二著を送った。ブレイはこれを保存した。

1. "Bishop Berkley on Money: Being Extracts from his celebrated Querist—of such Queries as have Reference to the true Principles of the Issue of Money." (in ink-Chatham Place) Liverpool. London: Provrost and Co. 36, Henrietta St. Covent Garden: and all Booksellers. 1872. (40 page booklet)

2. Interest of Money. A legalized Robbery: has been the Ruin of all Nations: and Is Ruining England. (J.V.) Chatham, Liverpool. 1875. (10 page pamphlet)

またイングリスのしるすところによると、[19] ブレイはトマス・ペインの『理性の時代』("Age of Reason"—"Being An Investment of True and Fabulous Theology." Part One and Two. 207 pages. 1872. Josiah P Mendum, Publisher.) をもっていた。

ブレイは本書中に "J. F. Bray, 1873" とかき、また "1735" とかいた。(イングリスは後者をペインの生誕の年代としるしているが、ペインのうまれたのは一七三七年である。) この書物はブレイの後述の『神と人間との統一』に影響しなかったであろうか、これは一つの問題である。

一八七三年五月、ブレイは社会改革の綱領を略述した書翰を "The Word" (Princeton, Mass, edited by Ezra H. Heywood. May, 1873. Vol. II. No. 1.) に発表した。[20] ブレイはのべている。「私の生涯を通じての暇な時間は、社会的不当行為と提案されたさまざまの救済策との検討にささげられてきた。これらの救済策の多くはよかったが、実行不可能であった。大衆はそのあるものに対してはあまりに発達不充分であり、他のものに対してはあまりに貧しい。三五年余以来、私は大体つぎの綱領を採用した。それはすべての改革者にとってそれにもとづくにたるほどに一般的なものである。

(一) 現在の社会的政治的慣行によって掠奪されている農業、職人、商業および労働者階級よりなる一大政党の結成。

(二) この組織による全般的および州政府の管理。

(三) 現在の雇主と被傭者とよりなる協同的諸団体への全形態の産業の漸次的組織化。

(四) これらの諸団体は無利子で彼等に貸付けられあらゆる物に対する法貨であるべき連邦通貨の援助によって仕事をはじめさせられることになっている。このような通貨がもっぱらこれらの諸団体に貸付けられ、すべての他の通貨は回収されるべきである。

(五) これらの諸団体は商品を購買し、販売し、製造し、輸送し、個人にとってかわるべきである。

(六) 貨幣賃金は現在と同よう勤労(ナーヴィス)の価値に応じて高くも低くも支払われるべきである。しかし最低額は快適な暮しに充分に足りるべきである。

(七) 現在個人にあたえられている利益あるいは利潤とよばれているものは、すべての商品の費用に加算される歩合 (Percentage) に改変されるべきである、この歩合はあらゆる団体において一様であるべきであり、以下のものに対する一般的基金となるべきである、すなわち負債の支払、固定資本あるいは地所の購入、州および連邦の租税、住宅および環境の改良、教育的および他の諸目的、これである。

(八) すべての税関および税 (duties) の廃止。連邦あるいは州の一切の課税は不動産および動産に適用され徴収されるべきである。」

ブレイは他の労働新聞でもこの綱領に言及し、"The Vox Populi" はそれを再刷した。

同じく一八七三年五月四、五日、ニューヨークでひらかれた The American Labor Reform League の第三回年次大会においてブレイは副会長としてえらばれた。その席上でよみあげられた彼からの書翰の一節につぎのようにしるされている。[21] (彼はこの大会に欠席した。)

「私は永年現在アメリカ合衆国のみならずヨーロッパにもまた動いている気運を待ちつつあった。私たちの最近の戦争は黒人の白人に対する抗議から生じたが、現在の戦闘はすべての人種の男女の貨幣への隷属に対するものである。合体した貨幣が今日では国王であり、貴族であり、奴隷監督である、現在私たちをかこんでいるこのような条件下では真の共和国は存在しえない。……私は主人と雇人という現在の条件にもとづかない労働と資本との完全な連合、人間が平等であるかぎり公正で平等主義的である連合における場合をのぞいて社会にとっての希望をみない。骨折りの収益と利潤とは骨折りに属しなければならない。現在の分配の体制は略奪である。大衆

の貧困は百万長者の富の必然的付随物である。……労働の不当な処遇は不平等な交換から起きる。平等な諸価値が平等な諸価値と交換されねばならない、もしそうでなければ貧者を抑圧しようとする富者や、社会組織に内在する政府の欠陥を除去しようとする不断の、しかし無用な革命や戦争がつねに存するであろう。

私は大会にのぞむ。大会が高きをめざし、しっかりとすすみ、かくしてどんな怠惰な夢想家をしても大きな社会革命――無数の世紀の不当な行為の最高点が私たちの上にさしせまっているという事実に覚醒させるであろうことを。たしかにあたらしい人間によって指導され、あたらしい政治的社会的思想にもとづいたあたらしい政党の結成にとっていまは好機である。州ならびに連邦の立法機関の腐敗は、財界や独占の不正行為の反映にすぎない。社会的正義なくして政治的正義はありえない。西部の農民たちはまもなく貨幣の専制に対する来るべき闘争を東部の労働者たちとともにするであろう。」

これは『労働の不当な処遇』におけるとほぼ同じ趣旨の批判であり提案である。

一八七七年、American Labor Reform League の第七回年次大会がひらかれたさい彼はそれへの招待を辞退した。この年、"The Detroit Socialist" が刊行され、彼はその寄稿者となり、これを通じてデトロイトの主要な社会主義者のあるもの――すなわち編集長の Frank Hirth および Judson Grenell' Joe Labadie である。――と交渉をもった。

「一八七七年という年は――カーがのべているように、――アメリカ合衆国における長期の産業上の沈滞の頂点であった。失業と浮浪とがおどろくべき割合をしめた。一般的不安が労働者と警察との間の衝突を結果した。弾圧と犠牲との報告はブレイをうごかして社会の再建のためのプランをえがくためにふたたびペンをとりあげさせた。[22]」

一八七〇年代をつうじて彼がきわめて活動的であったことが、刊行された書翰や保存されている著作の草稿によってわかる。彼は貨幣、信用問題やあたらしい社会経済的秩序についてのべたのみならず、Pontiac の一農民として彼の仲間の農民の運命や当時のグレインジァ運動 (Granger Movement) に関心をもった。こうして遺稿 "Common Sense for Farmers" がかかれた。(文献目録B参照。)

ブレイの書翰は彼の時代の労働者の輿論を形成するのに大いに寄与した。しばしば感謝の評言がブレイになされた。たとえば、"The Weekly Worker" において一寄稿家は、ブレイを「権利のための神の宝石の一つ」として言及した。(Oct. 2, 1875) これは社会主義者 (Socialists) がいかに著述家としてのブレイを重視したかを示すものである。

一八七八年の冬、ブレイは『神と人間との統一』("God and Man a Unity") をかいたが、彼はそれを刊行するにたる金をもっていなかったので、一八七九年にそれをかきなおし、息子の貯蓄とデトロイトの社会主義者たちとの援助によって同年に刊行しえた。この書物については、文献目録A (および、ちかく発表される研究論文) を参照されたい。

同じ一八七九年七月四日にブレイはデトロイトの八時間デモンストゥレイションにおいて演説した。このデモンストゥレイションを援助した活動的団体、The Socialist Labor Party of Detroit がブレイを招いたのである。彼はのべた。「八時間が改善的であるかぎり、社会主義は病弊の根底を破壊する、かくして一日に六時間以上働くということは不必要になるであろう。より多くの機械が発明されたならば、時間は五あるいは四時間にすら減少されえた。[23]」

彼の演説は人々によって賞賛された。「ながいあいだブレイの述作によって彼をしり、また他のものの意見に従うようにではなく彼の意見にしたがってきたのであるから、デトロイトの社会主義者がこの労働軍の老兵を迎えるのは通常の感情をもってではない。ブレイ氏は彼のかくように語る――あらゆる意見が適切であり、あらゆる点が明瞭に定義されている。彼の演説はとくに八時間労働日そのものではなく労働問題一般をあつかったものである。[24]」ちなみにアメリカでは一八七〇年代にはじめて八時間労働日の運動が一〇時間労働日のそれのあとをつぎ、AFLの綱領において八時間労働日が重要な位置をしめた一八八六年に大なる刺戟が生じた。[25]

その頃のブレイの活動としてしるさなければならないのは、Socialist Tract Association への協力である。この協会は The Socialist Labor Party of Detroit によって援助されており、Judson Grenell はその書記であった。この協会は宣伝用小冊子を刊行した。それらは一八七九年七月四日からその年の後半にかけて一四〇、〇〇〇部刊行された。小冊子の刊行は一八八〇年まで意図されたが、イングリスの調査によれば、左の七種のみが保存されている。

1. What is Socialism.
2. Government.
3. What Socialism means.
4. Who should be Socialists.
5. What Socialism offers.
6. A just Criticism.
7. Government Control.

ブレイ、W. H. G. Smart などが執筆に加わったが、著者名のかかれていない小冊子であるから、ブレイの寄与を正確にしることはできない。しかしとにかく彼は協会のために数篇の小冊子をかいたという記録がある。[26]

なお一八七九年においてしるすべきことは、ブレイと Louis [Lewis] L. Masquerier[27] との接触である。Masquerier は George Henry Evans の非常に熱心な仲間であった。二人はアメリカ合衆国政府が株式会社や鉄道に広大な土地をあたえつつあったときに民衆のための自作農地に関心をもっていた。Masquerier はブレイと同ように The American Labor Reform League のはじめからの一員であった。彼等はともに "The Word" や初期の他の新聞のためにかいた。しかし Masquerier は政府を改革するという思想から無政府主義のイデオロギーへ向っていた。一八七九年のはじめころ彼

はブレイに彼の書物、『社会の再建』（"Reconstruction of Society"）をおくった。ブレイはそれをよんで評言をかいた。

同じ一八七九年にブレイは Detroit Socialistic Labor Party の党員であった。

一八八〇年、もしもデトロイトの社会主義者の代議士たちがシカゴにおける党大会からたちさらなかったならば、彼は Greenback Labor Party[28] 候補者名簿上に総裁として指名されたであろうといわれている。これはブレイの党にとっての価値を充分証拠だてるものである。

一八八六年五月にブレイは Knights of Labor に参加した。[29]（すでに一八八三年一月に Judson Grenell はそれへの入団をブレイにすすめた。）Pontiac のその集会はブレイの名をとって John F. Bray Assembly と命名した。（"Detroit Labor Leaf," June 30, 1886）ブレイがこの団体に全く共鳴したのでないことは彼の一八八五年一一月一一日付"Detroit Labor Leaf"に発表した書翰に示されている。そこで彼はその全二二条項が労働の大敵である大資本家および諸団体に言及もせず、これを打破もしないとのべている。

一八八六年五月四日にシカゴに Haymarket Tragedy が勃発したさいには、ブレイは資本の用具としての警察の暴力を非難し、[30] 逮捕された犠牲者のために弁じた。[31]

ブレイの晩年は社会改革の草案の起草でいそがしかった。彼は一八九四年の手帖のおわりに一三頁分の"Steps to Reform"をかいた。（それはその年の二月にかかれたものである。）この草案はおそらく彼の最後の社会改革の構想を示すものとして注目される。しかしそれは彼の『労働の不当な処遇』以来ひきつづき支持されてきた見解の反復であってとくにあたらしい展開はない。草案を引用したジョリフも、それは「資本と労働との協同の必要をひじょうに強調するから興味がある」とのべているのみである。

彼の最後の書翰は、一八九六年九月一二日付、"Paterson Labor Standard"に掲載された「健全なドル」"A Sound Dollar"[32]である。これは労働貨幣論である。[33] その一節にのべている。――

「すべての通貨の窮極原理はなにか衣食する物に依存する。私たちをして労働の『健全なドル』を『このドルはアメリカ合衆国中の労働ならびに労働の生産物、またすべての負債や税に対する法貨である』とのべる通貨を介してそれ自身ならびにその生産物に依存せしめよ。この通貨を国民に供給するに充分とせよ。連邦政府をしてこれを諸州に貸付けしめよ、後者は彼等に貸付けられた額に対して責任をもつべきである。州をして州銀行――それはこの貨幣を新しい工場や労働にとっての他の援助を設立するために二ないし三パーセントの手数料で抵当貸ししうる。――を設立せしめよ。

この労働通貨は死せる金に依存しないで金の出費を節約する。その金は金の負債の支払や金を要求する外国との交換にあてられるであろう。それは投機者によって『買占め』られたり操作されえない通貨である、というのは全国民がその銀行家であり支配人であるからである。それは金融上の攪乱や不景気を妨げるであろう。

さて農民階級や労働者階級をしてこの計画を検討せしめよ、そうすれば彼等はすべての他の通貨の形態よりもまさるその利益を発見するであろう。」

ブレイの自伝の晩年の記事はつぎのようにしるされている。「ブレイは Pontiac で友人または仲間とよべるものをもたなかった。そこにはブレイが労働運動のためになにかをかいたことをしっているものは一ダースもいなかった。彼はしずかに彼の仕事を追求し、人類にたいする義務をなしつつあるという自覚以外になにも報酬を期待しなかった。ブレイの一家は改革者の家族にふさわしく『その日暮しの』生活をしたといえるであろう。」

これによるとブレイの晩年は隠遁的で世間からしられていなかったかのようであるが、じっさいはそうでなかったことは以上の記述によってもあきらかであろう。一八八五年六月二六日、ブレイ生誕日における"Detroit News"の記者との会見記[34]――この筆者は切抜きへのブレイのかきこみによると Judson Grenell である。――によると、当時さまざまの急進的新聞紙上に彼の論説が発表されていた。そのうちでもほとんど毎週ブレイの書翰をのせたのは、"The Irish World""Denver Labour Inquirer""Hartford Examiner""John Swinton's Paper"である。また"The Detroit Socialist""Spectator""Unionist""The San Francisco Truth""Chicago and Cincinnati Socialists""The Milwaukee Emancipator"がブレイの書翰をのせた。この記事の冒頭に「この国の有する労働問題に関して労働の観点からする最も多作の執筆者の一人は Pontiac のジョン・F・ブレイである。」とのべられている所以である。ちなみにこの会見においてもブレイは終始、資本と労働との協同についてのべている。この協同は現状のままであれば必然的である爆発（explosion）あるいは激発（outburst）にたいする資本の側の恐怖によっておこなわれる。したがってそれは資本のためにもすすめられている。「現在資本化している数億が没収からすくわれうるのは、単に利潤を分割すると申出ることによってである。私は資本家が自分の利益にたいして盲目のままであることをおそれる。」「もしも彼等が申出るとすると、どうなるか？」「彼等は播種したと同じ程度に収穫するであろう。」

同じく資本と労働との協同の思想がいくつかの晩年の新聞論説についてうかがえる。彼は賃労働を必要とするすべての職業において資本と労働との協同を階級区別の廃止と同意義に解している。[35] 革命は必至的である。私たちはそれを準備しなくてはならない。しかし革命は単なる暴力的叛乱であってはならない。それは労働者の経済的生活を確保しないし彼の権利や自由を保証しないからである。「唯一の道はすべての賃労働を必要とする職業における任意的または強制的な労働と資本との連合を通じることである。」[36] ここで「強制的な連合」（enforced union）についても言及している点が注目される。[37] またさきにもみられたように革命か協同かの二者択一が資本にたいして提起されている点が注目される。恒久的雇傭とゆたかな賃金とはつぎのようにして得られる。すなわち、「労働と資本とのある形態の協同を通じてか、あるいは大動乱（a great upheaval）とこれらの生産能因の国民全体への没収とを通じてか」である。[38]

一八八六年六月に一記者との会見でブレイ自身、『労働の不当な処遇』以後のすべての労作はその仕上げであり繰返しであるとのべている。

「私は三〇歳にならぬうちに『労働の不当な処遇と労働の救済策』について一書をかいた。それ以来私がいたものはなんでも単にその書物が含むところのものの仕上げであり繰返しであるにすぎない。すべての私の経験は私が私の理論において正しかったことを証明した。もしも私が数年間生きながらえるならば、私はそれらが実際にすべてのものによって採用されているのをみるのを期待する。(39)」

私のみるところでは、初期においては協同的計画は、共産主義社会 (community) にいたる一つの過渡的段階として提案されたが（この点についてマルクスもフォクスウェルも指摘していることは、文献目録Aにおいてみたところである。(40)）、晩年の協同の提案においてはこのような展望をもたず、むしろ暴力的動乱（それが共産主義革命を意味したかどうかはあきらかでない。）にかわるものとして主張されているのである。もしもロイド・ブリチャードのべるように「彼の後年の刊行された著書における見解の表現が一八三九年の有名な小著におけるほど力強くなかった。(41)」とすれば、その理由はこの点に存するかもしれない。彼の全生涯における協同思想の意義について私たちはさらにたちいって検討する必要がある。(42)

一八九〇年代はアメリカの不況の時代であった。一八九三年に恐慌がおき、ブレイはとくに一八九三、九四年に農場でそれを感得した。彼は一八九二年の Homestead 罷業やアナキストの青年、Alexander Berkman に関心をいだき、また一八九四年の鉄道罷業や Eugene Debs に関心をいだいた。彼の貯えた切抜きから、イングリスはこれを推察している。Samuel Gompers は一八九三年六月ブレイの誕生日を祝して彼に手紙をかいた。

一八九三年、Karl Reuber はブレイの八四歳の誕生日の祝賀の詩の最後の部分をつぎのようにむすんでいる。

「労働のためのあなたのすべてのけだかい仕事のために、
　よりよい生活と法律とのためのあなたの堅実な努力のために、
　高貴な行為のために、人々の心に永久にあなたは生きている、——
　そしてすべてのよき人々はあなたを決して忘れないであろう。」

一八九七年二月一日、ブレイは労働者階級のためにささげたその生涯をおえた。

注

(15) イングリスは、ブレイの妻の父は、「Lapeer の非妥協的な、バプティストの巡回説教師」であるとのべている。(Inglis. p. 7.)

(16) Prichard. p. 20.

(17) K. Marx ; Der nordamerikanische Bürgerkrieg. Die Presse. Okt. 25, 1861. Der Bürgerkrieg in den Vereinigten Staaten. Die Presse. Nov. 7, 1861. 大月書店、マ・エ選集、補巻一。

なおマルクスの内戦評価については、A. Bimba ; The History of the American Working Class. 1927. pp. 117-8, 131-3. をみよ。

(18) M. F. Jolliffe ; Fresh Light on John Francis Bray. p. 243. Jolliffe. p. 10. note 2. Prichard. p. 23. note 1. 参照。ジョリフ（＝ロイド・ブリチャード）の記述はまったくイングリスのこころみた調査 (Bray Material. Vol. I. Item 23.) によるものである。

(19) Bray Material. Vol. I. Folio 46.

(20) Ibid. Item 23.

(21) Bray Material. Vol. III. Item 2.

(22) Carr. p. 409. Bray Material. Vol. I. Folio 57.

(23) The Trades [of Philadelphia]. Vol. I. No. 13. July 12, 1879.

(24) The Chicago Socialist. Vol. I. No. 44. July 12, 1879.

(25) E. E. Cummins ; The Labor Problem in the United States. 1932. p. 66. P. S. Foner ; History of the Labor Movement in the United States. Vol. II. 1955. pp. 98-101.

(26) Detroit News. June 27, 1885. Detroit Echo. July 1, 1885.

(27) A. Bimba ; op. cit., p. 103. J. R. Commons ; History of Labour in the United States. Vol. I. 1921. pp. 523—4, 531—2, 547.

(28) A. Bimba ; op. cit., p. 163.

(29) Carr. p. 414. イングリスはブレイの入団は多分一八八五年であるとみている。Bray Material. Vol. I. Folio 68.

(30) Detroit Labor Leaf. June 16, 1886.

(31) The Labor Leaf. Sept. 22, 1886. Bray Material. Vol. I. Folio 66-67. なお Haymarket Tragedy については、J. R. Commons ; op. cit., Vol. II. 1921. pp. 386, 392-4 P. S. Foner. op. cit., Chap. 7. 参照。

(32) Bray Material. Vol. III. Item 7. Jolliffe. pp. 35-36.

(33) アメリカにおけるブレイの労働貨幣論はグリーンバッキズム (Greenbackism) と関係があるようである。後者については たとえば、S. Perlman ; A History of Trade Unionism in the United States. 1923. pp. 51, 58, 282. をみよ。

(34) Detroit News. June 27, 1885. Detroit Echo-Weekly. July 11, 1885. Reviews of Labour's Wrongs and Labour's Remedy, by John Francis Bray. 1839-1890.

(35) J. F. Bray ; What is in the way? The Detroit Labor Leaf. Vol. I. No. 47. Sept. 30, 1885. Bray Material. Vol. I. Item 6. Jolliffe. pp. 23-25.

(36) J. F. Bray ; The revolution. The Detroit Labor Leaf. Vol. I. No. 51. Oct. 28, 1885. Bray Material. Vol. I. Item 7. Jolliffe. pp. 25-26.

(37) ブレイは自伝においてすでに『労働の不当な処遇』で「すべての職業における労働と資本との任意的または強制的な普遍的協同」を提案したかのようにのべているが (BS. p. 9.)、カーはこれをブレイの記憶ちがいに帰している。「この最後の "Brief Sketch" からの引用は、記憶の興味あるあやまりを示す。ブレイの最初の著書はいかなる場合においても協同がその上に建設されるにはきわめて不安定な基礎たるであろうところの、強制に関する一切の言及を注意深くさけている。あたらしい社会秩序の緩慢な進行にあきらかにもどかしがって彼が『神と人間との統一』において『強制的な協同』を生ぬるく唱道したのは生涯のひとときにのみであった。」(Carr. pp. 400-1.)

(38) J. F. Bray ; Coming to the final issue. The Detroit Lobor Leaf. Vol. II. No. 24. April 21, 1886. Bray Material. Vol. I. Item. 9. Jolliffe. pp. 27-28. 「大動乱」(「爆発」、「放発」) の可能性というブレイの思想は、同じ一八八六年の労働運動の昂揚——とくに五月における八時間労働

日要求ゼネスト――からうまれた。後者についてはエンゲルスの一八八六年六月三日付、ウィシュネウェッキー夫人への書翰をみよ。Briefe und Auszüge aus Briefen von Joh.-Ph. Becker, J. Dietzgen, F. Engels, K. Marx u. A. an F. A. Sorge und Andere. 1921. SS. 224—6. 大月書店、マ・エ選集、第一七巻、二四九—二五〇頁。

(39) J. F. Bray; A labor reformer for more than half a century, and yet filled with brightening hopes. Detroit Labor Leaf. Vol. II. No. 34. June 30, 1886. Bray Material. Vol. I. Item 5.

(40) なお G. D. H. Cole; op. cit., pp. 134-5. R. F. Harvey; Robert Owen: Social Idealist. 1949. p. 168. 〜参照。

(41) Prichard. p. 30.

(42) エンゲルスは一八八六年一一月二九日付、ゾルゲ宛書翰においてアメリカの労働運動がドイツのそれに比して約半世紀おくれているとのべている。「アメリカの運動は、一八四八年いぜんのわが国のそれと同じ段階にある。そこでは、真のインテリゲンチャ分子が、さしあたりその役割をはたすべきであろうが、それは、一八四八年前の共産主義者同盟が、労働者諸団体のあいだではたしたのとおなじ役割である。」(Briefe und Auszüge aus Briefen. SS. 238—9. 大月書店、マ・エ選集、第一七巻、二五二頁。) こういうアメリカの労働運動のたちおくれ(英米の労働者状態の相異をもたらした事情については、きわめて浅薄ではあるが、E. E. Cummins; op. cit., pp.13-16. 参照。)が、かつてイギリスであらわれたプレイの協同思想をしてもういちどアメリカでしかもそのままの形態であらわれしめたのではなかろうか。だが協同思想の国際的運動の上でのあからさまな放棄宣言は、一八六四年第一インタナショナルの創立にさいして協同――資本と労働との調和の立場でかかれた Mazzini の創立宣言草案よりもむしろ、労働の階級連帯性を強調したマルクスの草案――彼はイギリスの労働者が資本家の援助なしに Rochdale の協同組織によってなしたことや、イギリスの議会が一八四七年の一〇時間法案を資本家の抗議に反対して制定するにさいしてなしたことをあげた。――がイギリスの労働組合員によって受諾されたさいにみられたといってよかろう。(S. Perlman; op. cit., p. 73. J. R. Commons; op. cit., Vol. II. p. 205. M. Hillquit; History of Socialism in the United States. 1903. p. 178.)

十八世紀フランスの分益制

渡辺國廣

一

今日フランスでは一般に、メテリをボルドリと対比させ、ボルドリを一〇ヘクタール以下の小作地、メテリを一〇ヘクタール以上の小作地としている。規模によって区別する方法である。また今日では一般に、土地の所有者と耕作者の間で収穫物を配分する小作地をメテリと呼んでいる。この意味においてメテリは、耕作者が土地の所有者に対し貨幣で地代を支払う小作地ファルムと対比される。地代形態による区別である。いわゆる分益制と小作制なるものの違いがそこから生じた。

以上のことから推し、今日厳密にメテリとは、面積が一〇ヘクタール以上で、収穫物を土地の所有者と耕作者の間で配分する小作地といわなければならない。しかし一般には、収穫物を土地の所有者と耕作者の間で配分する小作地であれば、その規模や作付の種類にかかわりなく、メテリとして扱っている。現在フランスでは、かかる小作地としてのメテリが、地方により複雑な内容を示しながら、ほとんど全土にわたって散在し、とりわけ中部や西南部に集中的にみられ、場所によっては耕地の圧倒的部分がメテリで占められているという。近時それを廃止しようという強い要求があった。しかしメテリはフランスにおいて今になお存続し、増加の傾向すら示している。最近の調査の示すところによれば、一九四六年には耕地全体の一〇・五パーセントがメテリである。一九二六年にそれは一〇パーセントであった。*

耕作者の収穫した生産物の一定部分によって土地の上級所有権に報いるというこの慣行は、ローマ法において早くから親しまれて来たところであった。しかし中世の全体を通じ、フランスの大部分の地方はそれを知らなかった。メテリとして貸付けられたのは葡萄畠か新開地が主であり、いわばその採用は若干の特殊な場合に限られていた。フランスでメテリが穀物生産のための本格的な場として一般化したのは十六世紀以降で、貨幣収入に依存していた社会の諸層が危機のなかで自己を守ろうとした努力の所産であった。とくに支配層に寄食する属僚の間でその努力は大きかった。現に彼らは変動